



目次（著者敬称略）

1. ごあいさつ	岩波 はるみ（日本ミネソタ会 会長）	P.1
2. 叙勲の榮譽に浴して	石田 卓三（ミネソタ在住）	P.1
3. 有難きミネソタのご縁	鍵山 幸一郎（株式会社幸栄企画 代表取締役）	P.3
4. 私のミネソタ生活	杉本 竜也（日本大学教員・ミネソタ客員研究員）	P.5
5. 日本人留学生の就職活動事情について	中村 史織（日系メーカー人事職・2017.5 ミネソタ大卒）	P.6
6. ミネソタ大学 Alumni Association 活動報告	中村 旭（日本ミネソタ会 副会長）	P.7
7. 編集後記	金野 智大（日本ミネソタ会 ミネソタ通信 編集長）	P.8

1. ごあいさつ

：岩波 はるみ（日本ミネソタ会 会長）

ミネソタ通信が1990年6月10日に、創刊号を発行してから、28年の月日が流れました。日本ミネソタ会の若い参加者の皆さんは、まだこの世に誕生していなかった方もたくさんいらっしゃると思われ、歴史の重みを感じます。



さて、3年ぶりに発行の第12号は、2018年新春に、「今年はミネソタ通信の最新号を発行しましょう！」という日本ミネソタ会、会計監査の福田弥夫さんの一言からスタートしました。そして副会長の中村旭さん推薦により、新編集長、金野智大さんが指名され、彼のリーダーシップの下、ミネソタ在住でミネソタ企業に勤務されていた石田卓三さん、1980年代にミネソタに留学された鍵山幸一郎さん、現在ミネソタ大学に研究のため留学されている杉本竜也さん、そしてミネソタ留学から帰国されてまもない中村史織さんに寄稿していただきました。またミネソタ大学同窓会の理事でもある中村旭さんからは、UMAAの現在の活動報告と、「ミネソタ通信」今号のテーマ「スーパーボウル」にまつわる、ミネソタ時代の思い出が綴られています。今号も読み応え十分の内容ですので、ぜひ楽しんでご覧いただくと共に、皆様にとって、「ミネソタと日本とのつながり」の過去を振り返り、現在を知り、そして未来へと思いをはせる一助となれば幸いです。

2018年の今、地球上の人々の往来は、ネットでのつながりも含めると、ますます活発となりましたが、一方で、均質

化と差異化の「変容」の波のうねりの中で、我々が翻弄されることも、しばしば起こります。

日本ミネソタ会は、1984年の設立当初から、ミネソタをkeywordに、幅広いご経験や、様々なご意見をもつ、老若男女が、イベントを通じて集い、知り合う機会を提供することを使命としてまいりました。現在に至るまで34年間、活動を続けてこられたのも、皆様のイベント等への積極的なご参加と、多様性を受け入れる寛大な姿勢のお陰と、誠に感謝しております。

今後共、ご支援、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

2. 叙勲の榮譽に浴して

：石田 卓三（ミネソタ在住）

日本ミネソタ会の存在を知り、日本帰省時にクリスマス会に参加するようになって、10年近くになると思います。お互いに顔馴染みの方々もおられますし、まだ存じ上げない方も多いと思います。最近では若い方々の会への参加も増えて来ており、大変に嬉しく思います。



先日、「ミネソタ通信」の編集を担当されておられる金野智大様より、昨年2017年の私の叙勲対象となりました私の活動について「ミネソタ通信」へ寄稿を承りました。

日本政府の叙勲制度では、日本に住んでおられる日本人以外に、「在外邦人」又は「在外居住者」という範疇で海外に住む日本人（又は元日本人）受章者も選ばれます。2017年の在外居住者の旭日章受章者は春の叙勲と秋の叙勲を合わせて30名でした。その中でアメリカ合衆国からは一人でしたので、この度の叙勲は身にあまり栄誉だと思っています。私の叙勲対象は、在留邦人への福祉功労と日米文化普及功労と言うことでした。これは、私の本業（職業）ではなく、いずれも私のボランティア活動です。読者の方に、私が何故アメリカに来たのか、私の本業は何なのかを簡単に述べたいと思います。



▲旭日小綬章 勲記

大学院時代に興味を抱いた画像記録技術がたまたま米国ミネソタ州の化学会社（3M社）で発明されたものでした。この技術の研究開発をやってみたくらいと思い、その夢を叶えるために、この特許の発明者、David Morgan氏に雇ってもらいアメリカに来ました。渡米以来、会社勤めを引退する迄、一貫してこの技術の研究開発に携わりました。この技術を使って製品化されたビジネスも年間の売上高が、\$1 Billion（約1,100億円）を超えるようになり、アメリカ政府の環境庁（Environmental Protection Agency）から1997年の大統領（当時はクリントン大統領）賞を頂きました。この技術分野で私が取得した米国特許は20以上になります。私が、心血を注いだものは、このDryView技術の研究開発でした。自分の気力、体力そして知力の全てをかけた私の青春でした。

ボランティア活動に関わり始めたのは、私たち夫婦の三人の子供たちが日本語補習校に通い始めた頃です。学校の運営を担う運営委員長を務めたのがきっかけでした。日本に神戸女学院という中学、高校、大学を持つ学校がありますが、この神戸女学院は1875年にアメリカ人女性宣教師たちによって創られた学校です。神戸女学院の支援団体がシカゴにあります。Kobe College Corporation（KCC）というNPOのPrivate Foundationです。当

時、KCC会長を務めておられ、ミネアポリスにお住いのPatsy Cooper Gottschalk氏より、KCCが主催するUS-Japanシンポジウムの企画実行委員会のメンバーに誘われました。KCC主催のシンポジウムは1995年からだったと思いますが、その後、KCCの理事を引き受けました。このKCCへの理事を引き受けた頃に、ミネソタ日米協会の理事、そして会長を務めました。私のボランティア活動は、以上のように、ここに住む日本人社会への福祉活動と日米両国の友好親善、交流促進活動が主なものです。これら日本に関連した団体以外に、日本と直接関連した分野ではありませんが、自分の趣味でもある音楽の団体の理事を務めています。

以上述べましたように、会社の仕事以外にも、いろんな団体の役員（理事）の仕事ボランティアで引き受けてきました。私には、その仕事が生きていくうえでの信念、信条というものがああります。かつてのアメリカ大統領John F. Kennedyの1961年1月20日の大統領就任演説での言葉です。

My fellow Americans:

Ask not what your country can do for you -- ask what you can do for your country. という呼びかけです。「国が貴方に何をしてくれるかを問うのではなく、貴方が国のために何が出来るかを問おう」というような意味です。皆さんのなかには、半世紀以上も前に言われた陳腐なことを言うと思われる方もおられるかと思いますが、この言葉には、今、聞いても新鮮な響きがあると思います。これは、私たちが住む国という大きな組織だけではなく、私たちの身近にある組織に置き換えても同じことが言えると思います。例えば、自分が属する会社、学校、大学、団体、地域社会、全てに当てはまる言葉だと思います。自分が勤める会社のために自分は何が出来るのか、最も貢献出来るとしたらどのような分野か、自分が一番やりたいものは何かを常に考えてきました。また、日米両国のために、ミネソタのために、自分が住む地域社会のために、私に何が出来るかを考え、一所懸命に実行してきました。その活動の詳細を述べることは控えますが、私に関わる団体とボランティア活動、そして今回の叙勲に際して、恩師、久保走一千葉大学名誉教授から頂いた祝辞を載せて頂ければと思います。

ボランティア歴（所属する、または所属した団体）

- Vice president of Bach Society of Minnesota（ミネソタ・バッハ協会 理事 副会長）
- Member of board of directors, Chamber Music Society of Minnesota（ミネソタ室内楽協会 理事）
- President of Japan America Society of

Minnesota

(ミネソタ日米協会 会長、名誉理事)

- Vice president of Kobe College Corporation - Japan Education Exchange
(神戸女学院コーポレーション 理事 副会長)
- Founder and president of Minneapolis Japanese School
(ミネアポリス日本語補習授業校 創立者、理事長)

その他のボランティア活動

- ミネソタ州在住の日本人のためにシカゴ日本国総領事館からのミネソター日領事出張サービスを 1995 年から開始し、シカゴ総領事館領事班のサポートをする。
- US - Japan シンポジウムを 1995 年からミネアポリスとセント・ポールにおいて Kobe College Corporation 主催で開催する。
- 2001 年、常陸宮殿下がミネソタ大学より名誉博士号授与でミネソタをご訪問された折は、ホテルや訪問先等について、シカゴ日本国総領事 藪中三十二氏のサポートをする。
- 2005 年にミネソタで、シカゴ日本国総領事 吉澤裕氏と協力して日米友好 150 周年記念行事を計画、実施する。
- セント・ポール/長崎姉妹都市関連の行事や、長崎純心大学からの学生と高校からの生徒たちによる「歌の千羽鶴」のセント・ポール市訪問時のサポートをする。
- 神戸女学院高校からの生徒 20 数名のミネソタ州での夏期英語研修参加中の週末のホームステイ・プログラムのホストファミリーの斡旋等をする。

受賞歴

1. 米国 3 M 社技術優秀賞受賞：1983 年、1987 年、1991 年
2. 米国環境庁グリーン・ケミストリー・チャレンジ・大統領（クリントン大統領）賞受賞：1997 年（会社のプロジェクト・チームとして）
3. 米国ミネソタ州政府の諮問機関からアジア・パシフィック・ミネソタン・リーダーシップ賞受賞：2007 年
4. 日本の外務大臣（麻生太郎大臣）表彰と銀杯を賜る：2007 年
▼モンデール賞受賞の様子
5. 米国ミネソタ日米協会モンデール賞受賞：2011 年
※モンデール氏はミネソタ州出身の政治家、元アメリカ副大統領、元駐日アメリカ大使
6. 日本の旭日小綬章受章：2017 年



趣味

J. S. バッハ、盆栽、庭、音楽、木工、陶磁器、写真ほか

久保先生からの祝辞

Dear Mr. Ishida

October 2017

石田卓三さん

今般、貴君が叙勲の栄に浴されたとの報に接して、心から祝意を表します。叙勲の対象は、“アメリカ在留邦人への福祉功労及び日米文化普及に貢献”ということですが、長い年月をアメリカで新規技術の開発に係わりながら、同時に日米文化の融合に貢献されたことに敬意を表します。

貴君の技術者としてのアメリカ産業界に対する貢献は、多くの受賞メダルによって表徴されるように、まことに大きなものがあります。貴君は大学院の頃、画像記録材料の新しい芽を見つけ、アメリカの企業に入り長い年月をかけて育て上げ、新規でスマートな画像記録方式を社会に送り出しました。今も第一線で高画質画像記録方式として活躍する“3 M DryView Laser Imaging System”は貴君が学生時代からの命題であったと思います。技術の芽を見つけ、アメリカの地で育て、System を完成させ、広く世界に貢献するという、技術に携わる者として持てる至福の経験を基に、これからも日米の文化・技術の交流に貢献されるよう願って止みません。

貴君の更なる健康と発展を心からお祈りいたします。

久保走一

千葉大学名誉教授

Former Guest Professor, Rochester Institute of Technology

Former Research Associate, University of Rochester

3. 有難きミネソタのご縁

：鍵山 幸一郎（株式会社幸栄企画 代表取締役）

2018 年スーパーボウル LII（第 52 回）は、Minneapolis の U.S. Bank Stadium にて行われました。結果は Philadelphia Eagles が New England Patriots を破り、王者の座に就きました。残念ながら、我が Minnesota Vikings は、スーパーボウル一歩手前のリーグ決勝戦で、Eagles にボロ負けを喫し、地元開催のスーパーボウルには出場できませんでした。たまたま私は不幸にも、ニューヨークのスポーツバーで、スーパーボウルから遠ざかる Vikings の姿を見ていました。しかしそれほどがっかりしませんでした。なぜなら私は San Francisco 49ers の実はファンだからです。

忘れもしない1979年4月5日、高校を卒業したばかりの私は、語学留学のためにサンフランシスコに渡りました。当時の為替レートは250円前後にも関わらず、語学学校の3分の1程度は日本人留学生でした。時は流れ、ミネソタ大学でも、日本人留学生が減っていると耳にしますが、現代の若者はやはり安定志向なのでしょうか。残念なことです。

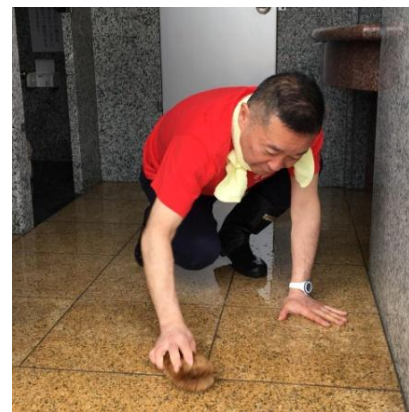
1981年Fall Quarterより、私のミネソタ大学生活が始まりました。ちなみにそのシーズンのスーパーボウルを制したのは49ersでした。サンフランシスコは、夏の霧を除き気候良し、食べ物良し、治安もそこそこ良しと、生活環境は申し分ありませんでした。その樂園を離れる決断をしたのは、もっと「日本人の少ないところに行かねばならぬ」の想いからでした。今のようにネットのない時代ですから、理想の大学を探すことは容易ではありませんでした。私の場合、自分の足で学校探しをしました。サンフランシスコからグレーハウンドのバスで、のべ90時間バスに揺られ、ニューヨークまで、学校探しの旅をしました。もう一度やれと言われても、とてもできない過酷な旅でしたが、今の私には貴重な体験になりました。途中ミネアポリスで下車をして、ミネソタ大学のキャンパスを訪問した際、これぞアメリカの大学だ、ここへ行くと強く感じてしまいました。旅行は夏でしたから、冬の厳しさなど知る由もない、衝動的な決断でした。

岩波会長とは、同じ時期に留学していました。私は寮生だったので、たまに会長の手料理をご馳走になりました。厳しい冬を3回過ごし、1984年12月にSchool of BusinessのBachelor Degreeをいただきました。先日実家から卒業証書が出てきたので、ちゃんと卒業できたと思います。

私は今でも特にスポーツを通じて、愛校心は継続しています。フットボール、バスケットボールを始め、ほとんどのカレッジスポーツをネットでフォローして、応援しています。試合結果のみならず、掘り下げて調べると面白い発見もあります。Duluth出身でミネソタ大学から2003年のNBAドラフトでプロになった、リック・リカート選手は、いま日本のプロリーグ茨城ロボッツでプレーしています。一度観戦に行き、Duluthから遥々日本に来ているリカート選手を激励したいと思っています。

私の父・鍵山秀三郎はイエローハットの創業者であると言うより、トイレ掃除の神様として知れ渡っています。現在84歳、2年半ほど前、脳梗塞を患うまでは、日本全国に留まらず、海外まで掃除に出かけていました。活動の内容については、「日本を美しくする会」のサイトをご覧ください。私自身も様々な掃除の会に参加します。目を覆い、息を止めた

くなるような学校のトイレ掃除や、朝の6時か、夕方の6時か区別がつかない、歌舞伎町の早朝街頭清掃などです。活動を通して、世の中の心の荒みをなくすことを目指しています。既に岩波会長が、日本ミネソタ会のサイトで紹介されましたが、ミネソタ大学同窓奉仕（と感謝）日と、日本を美しくする会のコラボが、昨年実現しました。私は当日山形の掃除の会に行つたため、残念ながら参加できませんでした。しかしこの活動が、母校に知れ渡つたことは、本当に嬉しく思います。



▲トイレ掃除に励む鍵山氏

掃除の概念は国によって違いがあります。掃除を人間修養の手段とするのは、日本独特だと思います。ただ掃除を続けることで、学校や地域が変わることは、世界共通だと証明されています。あの治安の悪かったニューヨークの市営地下鉄でさえ、掃除によって安全性を取り戻すことができました。ジュリアーニ、ブルームバーグ両市長が、描かれても描かれても、落書きを消し続ける決断を下したからです。私もニューヨークに出張しますが、今では夜中でも安心して利用できます。ご興味のある方は、「割れた窓理論」を検索してみてください。

また私たちの仲間が、毎月第三日曜日に、マンハッタンのダウンタウンで街頭清掃を行っています。出張の際は第三日曜日を挟むように、予定をいつも立てています。やり始めて12年が経過しましたが、近隣の認識が大きく変わったそうです。それまでは、冷やかな目で見られていたのが、今では「Thank you!」と声をかけてもらえるそうです。続けることの大切さを学びました。

ミネソタ会の皆様も同じだと思いますが、アメリカ生活を経験した人は、日本の良さを一般の人よりは強く感じられていると思います。良さには色々なカテゴリーがありますが、外国人観光客が急増していることから、大きな魅力があることは間違いありません。反面その良さを、私たちは大切にすることを失っていると思わざるを得ません。例えば伝統工芸品を作る跡継ぎがなく、途絶えてしまうということをよく耳にします。なぜ途絶えるか、それは購入する人がいないからです。日本の木も同じようなことが言えます。輸入品より割高だからと敬遠され、その結果日本の山は荒れ放題になっています。去年よりこの日本が誇る天然資源をふんだんに使うプロジェクトを進行させてきました。名付けて「日本の木、プロジェクト」in 東京&山口です。規模は小さいですが、日本

産の木材を少しでも多く使うことをコンセプトとしています。また建築もハウスメーカーの2バイ4工法のようなプラモデル形式ではなく、職人の技を活



▲完全木造アパートの一室（都内某所）

かす建て方になっています。今や大工さんは、絶滅危惧「職」になっています。その技を後世に継承することも、このプロジェクトで実現させています。詳しくは「朴の森」のサイトをご参照ください。

近い将来、もう一度ミネソタに行きたいと、強く願う理由が2つあります。ひとつには、フットボールを新しいスタジアムで、観戦したいからです。ご存じのように Metrodome は解体され、Gophers はキャンパスの屋根なしスタジアムに戻ってきました。古い Memorial Stadium で一度観戦したことがあります。あの興奮をもう一度味わいに行きたいと思っています。もうひとつの理由ですが、お世話になったホストファミリーに、ぜひともお会いし、家族の話とかしたいと思います。ミネソタに移り住んだ直後、実はホームシックにかかりました。そんなとき Bloomington に住まわれている家族を、ニューヨークで駐在員をしていた従兄弟から紹介を受けました。当時 IBM に勤めていたお父さん、そしてノルウェーから嫁いだお母さんは、私の両親より少し若いくらいでしょうか。頻りに食事に呼んでいただき、アメリカの一般家庭生活を体験させていただきました。ご両親とは今でもクリスマスカードのやり取りをしています。私も間もなく還暦を迎えますが、クリスマスカードに同封される写真を見ると、お元気なうちにお訪ねしたいと強く感じています。

大変なこともありましたが、留学先としてミネソタを選んで、本当に良かったと思います。この思いを共有できる、ミネソタ会の存在はとても貴重です。そしてミネソタを、若い世代が留学先として選んでもらえることを、強く願っています。

4. 私のミネソタ生活

：杉本 竜也（日本大学教員・ミネソタ大学客員研究員）

私がミネソタ大学に研究滞在することが決まり、そのご縁でミネソタ会に参加させていただくようになってから、多くの方々から「脅された」のが、何と言ってもその寒さでした。今回の冬、アメリカは大寒波の襲来を受け、ただでさえ寒いミ

ネソタは例年以上の極寒でした。マイナス 20 度に下がることも度々あり、体感温度でマイナス 30 度近くまで下がった時もありました。

私は静岡で生まれ育ち、大学以降は首都圏で暮らしてきました。人生の中で、氷点下にまで気温が低下した経験は多くありません。それどころか、私が高校を卒業するまでの18年間、地元の静岡県西部で雪を見た経験は2回だけでした（それも、風の中に雪が少し混じっている程度の雪です）。また、この地域は、日本の中でも最も日照時間が長い場所でもあります。そのような温暖な地域で生まれ育った私にとって、ミネソタの長く厳しい冬はほとんど異次元の経験でした。

無知というのは恐ろしいもので、マイナス 20 度まで気温が低下した日に近くのスーパーまで買物に出かけてしまいました。もちろん、防寒具を着込んで外出したのですが、冷たい風が向かい風で吹き付けていたこともあり、顔の皮膚は赤くはれてしまい、手はかじかんで感覚がなくなっていました。全身雪まみれでスーパーに着いたところ、店員に「歩いてきたのか！」と驚かれ、「こういう日は出歩かないことだ」と忠告されてしまいました。もちろん、帰りは Lyft で車を呼んで帰ってきました。帰宅してから気づいたのですが、スノーブーツを履いていたにもかかわらず、わずか 15 分の外出で足にしもやけができていました。それ以来、毎日 2 つの天気アプリをチェックしながら、外出計画を立てています。ミネソタ会の皆さんの「脅し」は事実でした。

そんな、この冬に行われたミネアポリス最大のイベントは、なんといってもスーパーボウルです。全米一の人気スポーツイベントですから、もちろんチケットを入手することはできませんでしたが、街は多くの観光客を迎え、大いに賑わいを見せていました。ただ、その一方で、耳にしたところによると、今回は例年になく厳しい警備だったそうです。確かに、この頃、ダウントウンに出た際、多くの警察官を目にしました。ミネアポリスというのは基本的には安全な街です。私もこれまでいくつかのアメリカの都市を訪ねたことがありますが、それらの街で感じたような殺伐とした雰囲気はミネアポリスで経験したことはありませんでした。そのため、スーパーボウルの時期の警備の厳しさは特に印象的でした。残念なことですが、私が渡米して以来、1ヶ月か2ヶ月に1度は何らかの銃乱射事件が発生しています。なかでも、悲惨な事件がラスベガスでの銃撃事件でした。例年以上の厳しい警備も、この事態を受けての対応だったようです。スーパーボウルという華やかなイベントの陰に、アメリカの持つ暗い一面を垣間見た思いがしました。

さて、現在私は在外研究生生活を、ミネソタ大学の

Department of Political Science で送っています。期間は、2017年の9月から1年間です。私の専門は政治思想史・政治哲学で、近年は「ケアの倫理」(Care Ethics)に関する研究に取り組んでいます。ケアの倫理は、様々な弱さをあらゆる人間が共通して持つ特性と考えることを前提とする政治哲学で、自立性といった人間の強さを前提条件としてきた従来の政治理論に根本的に再検討を迫り、市民社会やデモクラシーに新たな価値観を提示することを目的としています。

私の受入教員である Joan Tronto 教授はこの分野の世界的権威であり、私の滞在期間中だけでも中国、ブラジル、スペイン、オーストラリアなど、世界各国から研究者や大学院生が Joan を訪ね、共に研究活動に従事しています。私は、1週間ないし2週間に1度のペースで、Joan や彼らと共にワークショップを行っています。時には Joan と一対一で研究テーマに関して議論することもあります。非常に密度の濃い研究生生活を送っています。Joan はとてもフレンドリーな方で、月に1度程度はホームパーティーに招待してくれます。季節の食材で用意してくださるお手製のアメリカ料理のほか、彼女はイタリア系ということもあり、イタリア料理でもてなしてくれることもあります。私と同様に、彼女と共に学んでいる学生や大学院生だけでなく、ご近所の人も交えての食事会です。何かと不安なことも多い、ひとりでの海外生活を大過なく安心して満喫できているのも、文字通り彼女のケア(気遣い)あってのこと。彼女には本当に感謝の気持ちで一杯です。

実は、親切なのは Joan だけでなく、現在私が研究生生活を送っている Department of Political Science に関係する教員・研究者・スタッフの全員に共通して言えることです。アメリカに来る前、他の大学で在外研究を行った知人と話をした際、「アメリカのスタッフに優しさを求めても無駄。特に州立大学は期待しない方がいい」と聞かされていました。しかし、この事前情報は、いい意味で裏切られました。もちろん、何事も丁寧で礼儀正しい日本と比べるとアメリカ的な rough さはありますが、私の身近にいるほとんどすべてが、本当に親切で優しい方たちばかりでした。街は治安も良く、清潔で、そのうえ住んでいる人たちが親切ということであれば、海外に不慣れな人間でも安心して学生・研究生生活を送ることができます。それを考えると、ミネソタ大学というのは日本人が留学する大学としては最適な選択肢のひとつだと思います(冬の長さや厳しさはありますが)。

ただ、残念ながら、留学生の数も含めて、現在のミネソタにおける日本の存在感は強くありません。日本メーカーの電化製品はほとんど見ませんし、最後の頼みの綱である自動車は何とかがんばっていますが、韓国車が急速に追い

上げています。最近、ミネアポリス・セントポール空港を利用した際に感じたことですが、古い建物内の表記には日本語が使われていますが、新しい建物では中国語が使われていました。もはや、アジアを代表する国は、日本ではなく、中国のようです。これは私の気のせいかもしれませんが、そのような整備方針が本当に存在するのということも確認しているわけではありません。ただ、そのような印象を受けてしまうほど、日本の存在感が希薄なものになっていると感じざるをえないのです。

このところ、日本では、いたずらに日本の国や社会を無批判に称賛するような番組や本が登場しています。日本には誇るべきものがたくさんありますが、当然ながら多くの欠点も存在します。大切なことは、冷静に自身の問題を見極めて、前向きに解決のために取り組んでいくことです。それには、より俯瞰的に日本社会を見るが必要になります。その点で、海外留学や海外生活の経験はたいへん有効です。私自身が、それをいま実感しています。

現在の大学生やそのご家族の経済状況は、多くの場合、厳しい環境にあります。また、テロなどの安全上の不安もあります。ですから、無責任に海外留学をすすめることには躊躇を覚えわけではありません。それでも、もし事情が許すなら、若い世代の皆さんには積極的に海外に出る経験をしてもらいたいと思います。長い目で見た時、その経験がプラスになることはあっても、マイナスになることはないと思っています。

5.日本人留学生の就職活動事情について

：中村 史織 (2017.5 ミネソタ大卒・日系メーカー勤務)

ミネソタ会の行事に参加させていただいたのは今年のクリスマス会が初めてでしたが、ミネソタ会の活動の様子は大学時代からフェイスブックにて拝見しておりました。豊かな自然と鮮やかな色調のアートが融合するミネアポリスを離れ一年近く経ちますが、このように帰国後もミネソタを通じて皆様のご縁をいただきましたことに感謝申し上げます。この度、中村旭様より「ミネソタ通信」の寄稿を承りましたので、私自身の体験談を交えてアメリカに留学する日本人学生の昨今の就活事情について書かせていただきます。あくまでも日本で就職する場合の話になりますが、皆様のご経験された就職活動と比べながらご一読いただくと幸いです。

皆様もご存知の通り、近年社会を取り巻くグローバル化が進む環境に対し、企業の国際感覚を持った人材への期待が高まっております。就活において売り手市場と言われ

らに英語が堪能な人材に追い風がかかる中、留学経験のある学生はそうでない学生と少し異なる就職観や企業志向を持っているようです。マイナビ社の 2017 年の調査によると、正規留学生および交換留学を経験したことのある学生の特徴として、「安定している会社」ではなく、「自分のやりたい仕事ができる会社」である事をより重視して企業を選ぶ点があげられました。確かに私の周りでも学部で学んだ知識が活かされる企業を志望する学生が多く、日本国内で人気度の高い総合商社や大手メーカーに加え外資系のコンサルティング会社が人気でした。

海外の大学に留学中で日本での就職を希望する場合、OB 訪問や企業説明会に参加し自分の気になる会社に務める社員から「生の声」を聞く機会は少なく、国内大学の学生と比較すると企業の情報収集における環境は十分ではありません。しかし、インターネットから会社の採用情報や求められる人材について簡単に情報を入手できます。ミネソタ大学では年に数回程度キャンパスリクルーティングが行われ、希望者を対象にセミナーや面接も実施されていました。私も就職活動を意識し始めた頃から日本国外の大学に通う友人と情報を交換しながら、企業の採用ページやオンラインのニュースを毎日チェックし企業研究や自己分析をしていました。

日本での就職を希望する多くの日本人留学生は、留学もしくは海外での職務経験がある方を対象としたキャリアフォーラムにて面接を受け内定を決めます。その中でも毎年 11 月に開催されるボストンキャリアフォーラムには日本語と英語を使い仕事ができる人材を求め 200 社を超える企業が参加するため、アメリカに限らず世界中から応募者が集まります。会場内は企業説明ブースと面接ブースに分かれ、この二日間で内定を決めるぞ！と意気込む学生の熱気が漂っていました。中間試験の時期と重なり、初めての東海岸を堪能できず少し悔しい思いでローガン空港を後にした事を覚えています。

晴れて内定を獲得し帰国後日本の企業に就職しても、海外の大学を卒業した入社 3 年以内の若手の離職率は日本国内の大学を卒業した就職者よりも高いそうです。限られた情報の中から就職先を決めてしまうため、ミスマッチが発生しやすいという話を聞いたことがあります。もちろん最初から希望通りの仕事ができればベストですが、自分のやりたい事を追求する行動力と柔軟性は、母国から離れ不慣れた場所で一から人間関係や生活の基盤を築き上げてきた留学経験者の特徴とも言えるのではないのでしょうか。とりとめのない話になってしまいましたが、これからも Minnesotan の温かさに支えられた日本人が各々の就職先で、多様性を重んじる組織づくりに寄与される事を楽し

みにしております。

6. ミネソタ大学 Alumni Association 活動報告 ： 中村 旭（日本ミネソタ会 副会長）

日本ミネソタ会は、2014 年の 30 周年を期に「老若男女が気軽に集う交流の場」として発展していくよう、幹事がリードをとり若い Minnesotans 参加を促す試みを活発化させております。2016 年、この活動がミネソタ大学の目に留まり、University Minnesota Alumni Association



▲2017UMAA Award 受賞

(UMAA) より理事派遣の打診がありました。岩波会長の推薦を受けて、副会長である私が 2016 年 9 月より UMAA の理事会 (Board of Directors) のメンバーに就任いたしました。

現時点でミネソタ大学卒業生は全世界で 57.1 万人。そのうち 63% がミネソタ州、また 50% が Twin Cities 地域に居住しています。ミネソタ大学自体は 2.6 万人を雇用する州内第 5 位の雇用事業体。ミネソタ州に対する税収貢献は年間 4.7 億ドル (約 500 億円) にのびります。社会環境の激変により、ミネソタ州の政治・経済において重要な役割を担うミネソタ大学にも種々の改革が求められるなか、UMAA の長い歴史で「初の外国人理事」として熱い期待をもって理事会に迎えていただきました。

大学経営における卒業生に対する期待は年々大きくなっていくなか、米国外に居住する卒業生とどのように関わっていくかということは、ミネソタ大学にとって新しくかつ重要な課題となっています。これまで 2 年間の活動は、次にあげたように日本ミネソタ会での経験を通して得たものを理事会に紹介・還元していくものでした。

1. 日本ミネソタ会の活動紹介：2018 年 1 月 27 日の UMAA 地域委員会 (Geographic Council) で、岩波会長より日本ミネソタ会の活動を紹介していただきました。お花見を含む年次イベント、ゴルフ・文化活動、ミネソタ・ユース (若手自主運営の自己啓発)、奉仕活動等により、20 歳台から 80 歳台まで多くの参加者を集める日本ミネソタ会の活動ぶりは、“Global Best Practice”と数多くの素晴らしいフィードバックをいただくことができました。

2. UMAA Annual Award「優秀プログラム賞」受賞：ミネソタ大学からの留学生の歓迎会を兼ねて開催しているミネソタ会恒例の「お花見」が、2017年度 UMAA 優秀プログラム賞に選出されました。10月23日には岩波会長、山口副会長とともにミネアポリスでの授賞式に参加。12月のミネソタ会クリスマスパーティに UMAA 関係者を招致し受賞を祝いました。
3. 韓国同窓会総会への出席：2017年12月には UMAA 関係者に同行して、ミネソタ大学の韓国同窓会組織の年次総会に出席。教育界重鎮の文龍麟会長をはじめ多くの卒業生と交流を持つことができました。

残りの任期（2期6年を予定）は、理事会・各種委員会活動を通じ UMAA 理事としてより幅広く、将来にインパクトがある以下のような活動を手がけていきたいと思っています。

1. 現役学生へのサポート強化：日本からミネソタの学校に留学している学生、ミネソタから日本に留学してきている学生に対し、就学・就職その他のメンタリングを含む支援を行うプログラムの拡充。
2. アジア地域同窓会組織との交流：卒業生間の交流における範囲や頻度を増加させるため、韓国・中国等近隣諸国の同窓会組織との連携。
3. ミネソタ大学とのコミュニケーション整備：海外卒業生と大学が円滑、柔軟にコンタクトできるようなコミュニケーション体制を構築。
4. UMAA CEO の Lisa Lewis 氏来日：2019年6月に UMAA のトップである Lewis 氏に来日していただくよう調整中です。“Global Best Practice”としての日本ミネソタ会の活動報告の他、一橋大学・上智大学等友好大学への訪問、近隣諸国の同窓会幹部とのミーティングを企画。

ボランティアベースであり、私個人でできることは限りがありますので、皆様から助言をいただければ幸いです。

皆様のご支援のおかげで、たくさんの方に含む多方面の方々から日本ミネソタ会のイベントや運営に関わっていただくようになりました。今後もミネソタ大学をひとつのコアとしながら、日米の教育機関、ミネソタ関連企業、個人の方々を含む、ミネソタを愛するたくさん皆様が、ミネソタと触れる機会を提供する橋渡し役として日本ミネソタ会が発展していくことを目指して活動していく所存です。

<おまけ>

先日ミネアポリスでプロ・アメリカンフットボールの優勝決定戦スーパーボウルが行われましたが、26年前1992年12月にミネアポリス・メトロドームで行われたスーパーボウルには、

日本テレビの生中継のために長島茂雄さんと明石家さんまさんがミネアポリスにいらっやいました。私はちょうど留学中だったことから、仲間と一緒にレストランで待ち伏せし首尾よく一緒に写真をとることができました。



▲明石家さんま氏と

長島さんは2期目の巨人監督就任直前。その後 Twins から Dan Gladden、Shane Mack という2選手を巨人に移籍させました。さんまさんは大竹しのぶと婚姻中。ミネアポリスへの訪問に別な女性を同行させたとの報道がありました。（真偽のほどはわかりません）



▲長島茂雄氏と

ミネソタにまつわる懐かしい思い出です。

本件に関するお問合せは中村まで。

nakamuraasahi@aqua.plala.or.jp

7.編集後記

：金野 智大（日本ミネソタ会 ミネソタ通信 編集長）

読者の皆様、ここまでミネソタ通信をご覧いただきまことにありがとうございます。この度、日本ミネソタ会副会長の中村旭様よりミネソタ通信の編集責任者としての大役を仰せつかりました、金野智大と申します。編集には最新の注意を払ってはおりますが、誤字・脱字等ございましたら何卒ご容赦ください。

今回のミネソタ通信にご協力いただきました、石田様・鍵山様・杉本様のような素晴らしい先輩方、また、中村史織さんのようにエネルギー溢れる若手のお話を聞くことができ、自身にとっても大変良い刺激になりました。執筆者の方々にはこの場を借りて深くお礼申しあげます。加えて、ミネソタ会会長の岩波様や副会長の中村旭様、編集のサポートを頂きましたミネソタ会の皆様も大変ありがとうございました。

今後も皆様にミネソタ通信をお届けできるよう尽力させていただきますので、引き続きよろしく願いいたします。